

「なんでもできる片まひの生活-くらしが変わる知恵袋」

単行本 2003/6/20 臼田 喜久江 (著),

藤原 茂 (編集) 青海社

定価¥2640

出版社ホームページより

「障害のある方が自分を取り戻せるように！この本の中にはリハビリテーションの神髄が随所に潜んでいます。理論ではなく、事実として紹介しています。どこの家庭にもある日用品を使い、住宅改修などを行っているわけでもないのに、不自由のない生活を送れるのはなぜか。障害のある方が自分を取り戻し、生きがいのある人生を送れるように、当事者とリハビリの専門家がくらしを変える知恵袋の紐を解く。」

著者は山口県にある「自己選択、自己決定」を原則とするデイサービスセンター「夢のみずうみ村」の利用者です。編者はみずうみ村を生んだ作業療法士の藤原茂さんです。

きょうと福祉倶楽部でも夢のみずうみ村は何度も見学をさせていただいています。

この施設は利用者さんが自由にやりたいことを選んで、自由に過ごす。

主人公は施設ではなく利用者さん御自身というコンセプトが貫かれたうらやましい施設です。

この施設には「これがリハビリテーションだ」というプログラムはありません。

ただその施設の「リハビリ」が暮らしをゆたかに変えてくれるのです。

著者の臼田さんはかなり重度の片まひをお持ちのようです。

多くの方がリハビリテーションは万能という幻想をお持ちなのではありませんか？

歩けない人が「若い頃とおなじように歩けるように」といつまでも

かなわぬ目的のためにリハを続け疲弊している人たちがたくさんいます。

臼田さんは障がいを元どおりに回復させることはできませんでした。

だけど臼田さんは失われた機能を補う工夫でできる事を取り戻していきます。

着替えをする、料理をする、お掃除をする、お風呂に入るなどなど。

その人がもつ力を取り戻していく記録であり、障がいを持つ人々へ勇気を与える励ましの書です。

忘れてはいけない記憶-いのちを守る国を求めたい

わたしたちが暮らす乙訓地域の目と鼻の先、桂川河川敷で当時54歳の男性と一緒に暮らしていた86歳の認知症の母親を殺し、自分も死のうとした

「京都・伏見認知症母殺害心中未遂事件」

という事件があったのを覚えていますか？それは2006年2月のこと。

父親の没後母と暮らした男性。母のお世話をがんばっていました。母は認知症が進み「徘徊」も頻回に起こすようになりました。

男性は仕事を続ける事が出来ず、京都市福祉事務所の生活保護の申請にも行きました。しかし京都市は保護の要件を満たしたこの世帯を門前払いに。

保護の申請にいった時はまだ仕事は休職扱い。それを理由に京都市は保護申請を受け付けなかったのです。

そして親子は追い詰められます。

「もう生きられへんのやで。ここで終わりや」という息子。

そして子は母のいのちを奪います。子も後を追おうとしますが死にきれず一命を取り留めました。そして罪に問われた子は2006年7月に懲役刑が確定、服役します。

罪を償って出所した男性のその後は衝撃的でした。

琵琶湖に飛び込み自殺です。所持金は数百円だったとのこと。

想像してみませんか？

京都市がきちんと生活保護の申請を受け付けていれば。

介護の不足で仕事を辞めないですんだなら。

母は天寿を全う出来たことでしょう。

息子も大好きな母のいのちを奪うまでに追い詰められることはなかったでしょう。

あの事件から15年、あの頃よりもっと日本の介護制度は悪くなっています。

生活保護も違法な運用が亀岡市など各地で見つかっています。

この事件を忘れず、わたしたちは政治に介護保障を求めていきます。

いのちをないがしろにする国に未来はありますか？

2021年も多くのいのちが「自己責任」と奪われました。

来年こそ暖かな日差しが降り注ぐ日本にしたいものです。

わたしたち介護従事者の「優しさ」

はこんな悲劇に怒ることができる

行動出来る意志が必要です。